



TITLE:

朱子語類讀書法篇譯注(三)

AUTHOR(S):

興膳, 宏; 木津, 祐子; 齋藤, 希史

CITATION:

興膳, 宏 ...[et al]. 朱子語類讀書法篇譯注(三). 中國文學報 1995, 50: 158-180

ISSUE DATE:

1995-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177575>

RIGHT:

朱子語類讀書法篇譯注 (三)

興膳宏

京都大學

木津祐子

同志社女子大學

齋藤希史

京都大學

93 讀書不可不先立程限。政如農功、如農之有畔。爲學亦然。今之始學者不知此理、初時甚銳、漸漸懶去、終至都不理會了。此只是當初不立程限之故。廣。

讀書するには、まずくぎりを設けておかななくてはならない。「まつりごとは農作業と同じことで、田畑に畔があるようにするものだ」というが、學問もやはりそうだ。いまどきの初學者はこの道理がわからず、最初は張り切っている、だんだん怠けていき、結局は何もものにできない。これはひとえに最初にくぎりを設けておかなかったせいだ。

輔廣

(校勘) 朝鮮古寫本 「先立程限」↓先立个程限

(注) 「程限」は、39條既出の「課程」とほぼ同意のことばで、讀書の過程で定める區切りのこと。「政如農功……」は、『左傳』襄公二十五年十二月に「子產曰、政如農功、日夜思之、思其始而成其終、夕而行之、行無越思、如農之有畔、其過鮮矣」とあるのによる。

『朱子讀書法』卷一「循序漸進」の「每書誦讀考索之序」に、「政如農功、如農之有畔、爲學亦然」の部分のみ記錄される。

94 曾裘父詩話中載東坡教人讀書小簡、先生取以示學者、曰、讀書要當如是。按、裘父詩話載東坡與王郎書云、少年爲學者、每一書皆作數次讀之。當如入海、百貨皆有。人之精力不能兼收盡取、但得其所欲求者爾。故願學者每次作一意求之。如欲求古今興亡治亂、聖賢作用、且只作此意求之、勿生餘念。又別作一次求事迹文物之類、亦如之。他皆放此。若學成、八面受敵、與慕涉獵者不可同日而語。方子。

曾裘父の詩話に、蘇東坡が人に讀書の仕方を教えた短い手紙を載せているが、先生はそれを學生に示しておっしゃった。「讀書はこのようにせねばならない。」裘父の詩話に、蘇東坡の「王郎に與うる書」を引いて、言っている。「若い學徒は、

一つの書物を何回も讀まねばならない。ちょうど海に入ればあらゆる物があるようなものだ。人間の力では、すべてを取り盡くすことはできず、欲しいものだけしか手に入れることはできない。だから學ぶ者は、常にねらいを定めて追求してほしい。古今の興亡治亂・聖賢の働きを考究しようとするなら、まずはそこにねらいを定めて追求し、他にあれこれ餘計な考えを起こさないこと。また、聖人の事跡・禮樂制度の類を考究しようとする場合も、やはり同じだ。」ほかのことでも、みなこのようにしなさい。學問が成就したら、どこからかかっても無敵で、廣く淺く學ぼうとする者とは、同日の談ではない。李万子

（校勘）朝鮮古活字本・刊本 與慕涉獵者↓與涉獵者

朝鮮古寫本 當如入海↓富如入海 與慕涉獵者↓與涉獵者

（注）「與王郎書」は、『蘇軾文集』卷六〇尺牘に收める「與王庠五首」之五のこと。該當部分は以下の通り。「……但卑意欲少年爲學者、每一書皆作數過盡之。書富如入海、百貨皆有之人之精力、不能兼收盡取、但得其所欲求者耳。故願學者、每次作一意求之。如欲求古人興亡治亂聖賢作用、但作此意求之、勿生餘念。又別作一次求事迹故實典章文物之類、亦如之。此雖迂鈍、而他日學成、八面受敵、與涉獵者不可同日而語也。甚非速化之術、可笑、可笑。」

「曾裘父詩話」は曾季狸『艇齋詩話』を指す。本條の細字注

朱子語類讀書法篇譯注（三）（興膳・木津・齋藤）

部の「少年爲學者、……」は『艇齋詩話』では、「少年爲學者、每一書皆作數次讀。書之富、如入海、百貨皆有」につくるが、それは蘇軾「與王郎書」に、より近い形になっており、本條に見える「當如入海」は恐らく「富如入海」の筆寫の誤りであろう。校勘にも挙げたとおり、朝鮮古寫本はまさにそのように作っている。但し、『蘇軾文集』で「但作此意求之」とつくる箇所は、『艇齋詩話』でも本條と同じく「且只作此意求之」に作る。

95 尹先生門人言尹先生讀書云、耳順心得、如誦己言。功夫到後、誦聖賢言語、都一似自己言語。良久、曰、佛所謂心印是也。印第一箇了、印第二箇、只與第一箇一般。又印第三箇、只與第二箇一般。惟堯舜孔顏方能如此。堯老、遜位與舜、教舜做。及舜做出來、只與堯一般、此所謂眞同也。孟子曰、得志行乎中國、若合符節。不是且恁地說。廣。

「尹先生の門人が、尹先生の讀書について次のように言っている。『耳に素直に入ってきて心にじっくり理解され、聖賢の言が自分の言葉のように口に出る。』努力が窮まれば、聖賢の言葉をお口にしても、まるで自分の言葉のようになるものだ。」しばらくして、言われた。「佛教で言うところ

ろの心印がこれだ。一人めに心印が傳われれば、二人めに傳えても、全く一人めと同じになる。さらに三人めに心印が傳わってもやはり二人めと同じようになる。堯と舜や孔子や顔回だけが、そこまで達することができた。堯は老いて舜に位を譲り、舜にまつりごとをさせたが、舜がやるようになる、全く堯と同じで、これこそが眞に同じ、ということなのだ。孟子が、『志を得て中國に行なえば、符節を合するが若し』と言ったのは、決してかりそめのことではない。」輔廣

(校勘) 朝鮮古活字本 功夫↓工夫

朝鮮古寫本 「讀書法下」所收、しかも「尹先生門人言尹先生讀書云、耳順心得、如誦己言。功」が九葉裏最終行にあり、それ以下は八葉第一行に續くという亂丁が見える。「都一似自己言語」を缺く。箇↓个

(注) 「尹先生」は尹焞(尹和靖)のこと。『宋史』卷四二八「道學」に傳がある。程頤の門人であった。本條に引用される言は、呂德元による尹焞の墓誌銘(正誼堂叢書本『尹和靖集』所收)に、「不哉聖謨、六經之編、耳順心得、如誦己言、窮觀其蘊、達俟其施」とあるのを指すのであろう。また、底本の中華書局本では、尹和靖の門人の言を「自己言語」までとしてい

るが、上引の通り「耳順心得、如誦己言」のみとすべきである。呂德元は呂稽中の字、呂本中の兄弟行に當たる。『宋元學案』卷二七「和靖學案」の「和靖門人」に傳が見える。

「良久」は、「しばらくして」の意。禪家の語録でも常用される。

「心印」は、言葉や文字を用いずに、直接佛の教えを心で了解し、悟ることを言う。

『孟子』の引用は、舜と周文王の行ないの同じきほどを述べた「離婁篇下」の言。「(舜と文王とは)地之相去也、千有餘里。世之相後也、千有餘歲。得志行乎中國、若合符節。先聖後聖、其揆一也」とある。

なお、『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」には、「尹先生門人嘗記先生讀書云、口誦心得、如誦己言。蓋工夫至後、誦聖賢言語、卻一似自己言語一般」と記錄される。

96 讀書須教首尾貫穿。若一番只草草看過、不濟事。某記舅氏云、當新經行時、有一先生教人極有條理。時既禁了史書、所讀者止是荀揚老莊列子等書、他便諸書劃定次第。初入學、只看一書。讀了、理會得都了、方看第二件。每件須要貫穿、從頭到尾、皆有次第。既通了許多書、斯爲必取科第之計、如刑名度數、也各理會得些。天文地理、也曉得些。五運六氣、也曉得些、如素問等書、也略理會得。又如讀得

聖製經、便須於諸書都曉得些。聖製經者、乃是諸書節略本、是昭武一士人作、將去獻梁師成、要寬官爵。及投進、累月不見消息。忽然一日、只見內降一書云、御製聖製經、令天下皆誦讀。方伯謨尙能記此士人姓名。又云、是時既禁史學、更無人敢讀史。時奉使叔祖教授鄉里、只就蒙求逐事開說本末、時人已相尊敬、謂能通古今。有一士人、以犯法被黥、在都中、因計會在梁師成手裏直書院、與之打併書冊甚整齊。師成喜之、因問其故、他以情告、遂與之補官、令常直書院。一日、傳聖駕將幸師成家、師成遂令此人打併裝疊書冊。此人以經史次第排、極可觀。師成來點檢、見諸史亦列桌上、因大駭、急移下去、云、把這般文字將出來做甚麼。此非獨不好此、想只怕人主取去、看見與衰治亂之端耳。賀孫。

「讀書するには始めと終わりを一貫させねばならない。いい加減にざっと読んでしまうのでは、何にもならない。わたしは、舅君が次のように言われたのを憶えている、「新經が世に行われた時、とても條理の通る教え方をする先生がいた。當時は、史書が禁じられていたから、読む書物と言えば、荀子・揚子・老子・莊子・列子などに限られてい

朱子語類讀書法篇譯注(二)(興膳・木津・齋藤)

たが、彼はこれらの諸書を読む順序をきちんと定めた。學問に入ったばかりの時には、もっぱら一つの書物だけを一心に読む。読み終わる、すっかり理解したら、次のものを読む。一つ一つに、すっかり通じて、始めから終いまで秩序だてて理解すること。このようにして多くの書物に通じたら、これが科擧の必勝法である。刑名度数などにも、それぞれ少しは取り組み、天文地理も少しはわかり、五運六氣もいくらかわかる。素問などの醫學書も、ひとまず學習する。御製『聖製經』を読むにも、諸書を一通りは理解しておかねばならない。『聖製經』というのは、諸書の節略本だ。昭武の一士人の作で、梁師成に献上して、官位爵位を求めようとしたものであった。差し出してから、何か月たっても音沙汰がなかったが、ある日突然、お上から一通の達示が下って、『御製聖製經、天下をして皆誦讀せしめん』とあった。方伯謨はまだその士人の姓名を憶えているぞ。」また、言われた。「この時には史學が禁止されていたので、誰も史書を読むとはしなかった。當時、大叔父の朱奉使升が郷里で授業をしており、もっぱら『蒙求』につ

いて、逐一話の一部始終を説き明かしていたのだが、當時の人はすっかり尊敬し、古今に通じていると稱賛したものだ。ある士人で、罪を犯したため刺青をされた人が都にいたが、思惑があつて梁師成のところで書院に泊まり込み、彼のために書籍をきちんと整頓してやった。師成は喜んで、そうしてくれたわけを訊ねると、彼が事情をなしたので、役をあてがい、常に書院に泊まり込めるようにしてやった。ある日、天子が師成の家に來られるということなので、師成は彼に家の書齋を整理させた。彼は經史を順序よく並べて、極めて見榮えがよかった。師成が點檢に來てみると、諸史書までも卓上に並んでいるので、大いに驚き、慌てて片づけて言った。『こんなものを持ち出してどうするつもりだ！』これは、單に氣にくわなかつたというだけではなく、君主がそれを取り上げて、治亂興亡のきつかけを目にするのを恐れたのであろう。」葉賀孫

(校勘) 朝鮮古寫本 某記舅氏云↓某記得舅氏云 方伯讓↓方伯模 師成喜之↓梁師成喜之 聖駕將幸↓見諸史亦列↓脫落 (注) 「舅氏」は、具體的に誰を指すのかは不明。朱子は、黄

榦の「朱子行狀」に「娶劉氏。追封碩人。白水草堂先生之女」とあるように、白水草堂先生すなわち劉勉之の娘と結婚しており、『宋史』列傳二二八隱逸下の劉勉之傳には「勉之經理其家、而誨熹如子姪」と見えるなど、劉勉之を指す可能性を否定できないが、「舅氏」という語自體、舅父を指す場合も、母や妻の兄弟を指す場合もある。しかしながら、朱熹の母などの親族について知り得る情報は極めて少なく、特定が困難である。

「新經」は、王安石撰もしくは王安石の學問を傳える者の著わした一連の經書の注解。『郡齋讀書志』卷一には、新經尙書義十三卷、新經毛詩義二十卷、新經周禮義二十二卷などが著録される。

「禁了史書」は、崇寧年間以降、經學を重んじ、史學を輕んじた風潮を指すのであろうか。以下に、その間の事情を窺わせる筆記の記述を抜き出して記す。

「崇寧以來、專意王氏之學、士非三經字說不用。至政和之初、公議不以爲是。……未幾、監察御史兼權殿中侍御史李彥章言、夫詩書周禮、三代之故、而史載秦漢隋唐之事、學乎詩書禮者、先王之學也。習秦漢隋唐之史者、流俗之學也。……不使士專經、而使習流俗之學、可乎？……奉御筆、經以載道、史以紀事。本末該貫、乃爲通儒。今再思之、紀事之史、士所當學、非上之所以教也。……時政和元年三月戊戌也」(『能改齋漫錄』卷一二)

「崇寧立三舍法、雖崇經術、亦未嘗廢史、而學校爲之師長者、本自其間出、自知非所學、亦幸時好以倡其徒、故凡言史皆力諷

之。尹天民爲南京教授、至之日、悉取史記而下至歐陽文忠集、焚講堂下、物論喧然、未幾、天明以言章罷」(『避暑錄話』卷下)

「梁師成」は、『宋史』卷四六八宦官傳に傳が見える、自ら蘇軾の子と名乗る。「本朝四 自熙寧至靖康用人」(一三〇・三一九)に、「蘇東坡子過、范淳夫子溫、皆出入梁師成之門、以父事之。然以其父名在籍中、亦不得官職。師成自謂東坡遺腹子、待叔黨如親兄弟、諱宅庫云々」と見える。

「五運六氣」は、中醫學の用語、五行と六氣(陰陽風雨晦明)に基づき、氣候と疾病の關係を見る。「醫家有五運六氣之術」

(『夢溪筆談』象數一)

「聖製經」は、醫書の名稱であるが、一般には「聖濟經」に作る。『郡齋讀書志』醫書類に、「聖濟經十卷、右徽宗皇帝御製、因黃帝內經、採天人之蹟、原性命之理、明營衛之清濁、究七八之盛衰、辨逆順之盈虛、爲書十篇、凡四十二章」と錄される。また「郡齋讀書附志」では、同じ書を「御製聖濟經」とし、政和年間廣く行われたことを記す。この書は、『直齋書錄解題』醫書類には、「聖濟經十卷、政和御製。辟廱學生昭武吳昉注」と記されるが、ここに見える「昭武吳昉」なる人物が、朱子の言う「昭武一士人」であろうと思われる。また、『四庫全書總目』子部醫家類には清の程林の刪定した『聖濟總錄纂要』二六卷が著錄される。

「方伯謨」は方士繇のこと。朱子の門人。『宋元學案』卷六九「滄洲諸儒學案上」に、「方士繇、字伯謨(謨に同じ)、莆田

朱子語類讀書法篇譯注(三)(興膳・木津・齊藤)

之人。父豐之、仕至監豐國鎮、朱子稱其詩豪壯。先生少孤、依母邵武呂氏。已而徙居崇安、從朱子遊」と傳が見える。

「奉使叔祖」は朱弁のこと。『朱子大全』卷八七「祭文」に「祭叔祖奉使直閣文」がある。また同卷九八「行狀」に、「奉使直祕閣朱公行狀」が見え、それには以下のように記す。「公諱弁、字少章。……幼穎悟、讀書日數千言、十歲能文、既冠、遂通六經百氏之書。」

「計會」は、「たくらむ、もくろむ」の意。『語類』の用例を挙げると、「某在紹興、有人訴不肯爲保長、少間却計會情願做保正、某甚嘉之、以爲捨易而就難。及詢之士人、乃云保長難於保正。又有計會欲爲保長者、蓋有所獲於其中。」(朱子八 論民)一一・2718)

「打併」は「片づける、始末する、整える」などの意。「性理三 仁義禮智等名義(六・二二)」に、「譬如水、若一些子礙、便成兩截、須是打併了障塞、便滔滔地去」や、「孟子二 公孫丑上之上(五二・1248)」に「若見得道理明白、遇事打併淨潔、又仰不愧、俯不忤、這氣自浩然」などと、用例が見える。いずれも「すっぱり片づける、處置する」などの意味で用いられる。

「點檢」は、この場合「確認する」の意。用例は、次の通り。「如韓文公廟碑之類、初看甚好讀、子細點檢、疏漏甚多。」(『論文上』一三九・331)

なお、『朱子讀書法』卷三「熟讀精思」には、冒頭の「讀書須教首尾貫穿。若一番只草草看過、不濟事」と同じ語句が、記

される。

97 近日眞箇讀書人少、也緣科舉時文之弊也。纔把書來讀、便先立箇意思、要討新奇、都不理會他本意着實。纔討得新奇、便準擬作時文使、下梢弄得熟、只是這箇將來使。雖是朝廷甚麼大典禮、也胡亂信手捻合出來使、不知一撞百碎。前輩也是讀書。某曾見大東萊呂居仁之兄、他於六經三傳皆通、親手點注、並用小圈點。注所不足者、並將疏楷書、用朱點。無點畫草。某只見他禮記如此、他經皆如此。諸呂從來富貴、雖有官、多是不赴銓、亦得安樂讀書。他家這法度却是到伯恭打破了。自後既弄時文、少有肯如此讀書者。賀孫。

近頃、本物の讀書人が少なくなったのも、科舉用時文の弊害だ。書物を取り上げて讀むとなれば、思惑が先に立つて、目新しいことを探ろうとし、書物の本旨にしっかりと取り組もうとしない。目新しいことが見つければ、時文のために使おうともくろみ、やがて熟練すれば、もっぱらそいつを利用しようとする。朝廷の大典禮なんぞも、いい加減に勝手放題にこじつけて用い、それがすぐに潰れてしま

う代物ともごぞんじない。先人も讀書していた。わたしが以前大東萊呂居仁兄に會ったとき、彼は六經三傳にすべて通じ、手ずから注を施し、小さな圈點もつけていた。注で不十分なところは、疏を楷書で書き込み、朱點を打っていた。雜に打たれた點はなかった。わたしは彼の『禮記』がそんな具合だったのを見ただけが、ほかの經書も皆同じだ。呂家はもともと富貴の家柄で、官位があったとはいえ、科舉を受けなかった人が多いので、ゆったりと讀書できたのだ。呂家のこのようなやり方は伯恭の代になってくずれてしまった。それ以後は、試験用の時文を作るようになり、あんなふうに讀書しようとするものは少なくなってしまうた。葉賀孫

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「討」「討得」は、「探る、ねらう」などの意。「内任」(一〇七・2664)の「只是胡亂討得一二浮辭引證、便將來立議論、抵當他人」も同じ意味での用例。

「新奇」は、目新しいことを言う。「今人爲經義者、全不顧經文、務自立說、心粗膽大、敢爲新奇詭異論。方試官命此題、已欲其立奇說矣。」(朱子六 論取士「一〇九・2693」)

「下梢」は、「やがて」という意味の口語。「今既要理會、也須理會取透。莫要半青半黃、下梢都不濟事」〔論知行〕九・154)や、「讀書貪多、最是大病、下梢都理會不得」〔自論爲學工夫〕一〇四・2614)などの例が見える。

「弄得」は、ある状態に至らせる、特に悪い状態に至らせることを言う。例えば、「風俗弄得這裏、可哀」〔小學〕七・127)や、「子靜舊年也不如此、後來弄得直恁地差異」〔自論爲學工夫〕一〇四・2619)など、全て同旨の用例である。

「捏合」は、「捏合」とも作り、「無理にこじつける、でっち上げる」の意。用例は次の通り。

「君子所貴於此者、皆平日功夫所至、非臨事所能捏合。」〔論語十七 泰伯篇〕三五・316)

「某人來說書、大概只是捏合來說、都不詳密活熟。」〔訓門人八〕一一〇・2901)

「大東萊」は呂居仁、つまり呂本中のこと。しかし、呂居仁は、『宋史』等によれば長男であり、本條の「大東萊之兄」が誰を指すのか不明。ここでは、ひとまず大東萊その人とみなして譯出した。呂居仁については、朱子は以下のように評している。

「呂居仁學術雖未純粹、然切切以禮儀廉恥爲事、所以亦有助於風俗。今則然無此意。」〔本朝六 中興至今日人物下〕一三一・3171)

「呂居仁家往往自擡舉、他人家便是聖賢。其家法固好、然專

朱子語類讀書法篇譯注 ㉑ (興膳・木津・齋藤)

持此、以爲道理只如此、却不是。」〔同3172〕

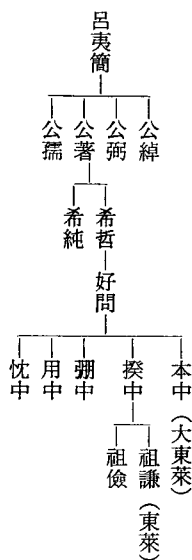
「呂居仁春秋亦甚明白、正如某詩傳相似。」〔春秋 綱領〕八三・2557)

「伯恭」は呂祖謙、つまり呂東萊のこと。(下掲の系譜参照)「赴銓」は、官途につくことをいう。呂家と「赴銓」との關わりについては、『宋史』卷四五五忠義傳十の呂祖儉傳に、「呂祖儉字子約、祖謙之弟也、……祖儉必欲終莽喪、朝廷從之、詔連年者以一年爲限、自祖儉始。終更赴銓」と見える。

なお、呂家の學問を傳える記録としては、『三朝名臣言行錄』八に、呂居仁の祖父にあたる呂希哲の人となりを次のように記すのが參考になる。「又從王安石學、安石以爲凡士未官而事科舉者、爲貧也、有官矣、而復事科舉、是僥倖富貴利達而已、學者不由也、公聞之、遽棄科舉、一意古學。」

「法度」は、もと法制の意であるが、ここでは、「やりかた、方針、風格」などの廣い意で用いる。『語類』では、「如今禮樂法度都一齊亂散、不可稽考」〔訓門人八〕一一〇・2996)や、「韓魏公富鄭公皆言新法不便。……如富公更不行、自用他那法度、後來遂被人言」〔自國初至熙寧人物〕一二九・3093)などの用例が見える。

本條の後半は、朱子とも關係の深かった呂家の學問を評論しながら、讀書の進め方を論じていく。名前の擧がった人物を含めた呂家の系譜を以下に記す。



98 精神長者、博取之、所得多。精神短者、但以詞義簡易者涵養。

活力の強い人は、廣く求めれば、得るものも多い。活力の弱いものは、ただ字義のわかりやすいところをじっくり味わいなさい。(記録者名を缺く)

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「精神」は、既出の語であるが、人の内面に蓄えられるエネルギーを意味し、その涵養を萬事につけて朱子が重んじたことは、たとえば「萬事須是有精神、方做得」(「總論爲學之方」八・128)、「凡做事、須着精神」(同上)などのことばからも察せられよう。

「涵養」は「じっくりあためて育てる」の意。「涵泳」と同義と考えてよい。『語類』中には頻出するが、主な用例は、次の通り。

「亦須窮理。涵養、窮索、二者不可廢」(如車兩輪、如鳥兩

翼。)(「論知行」九・150)

「須是將敬來做本領。涵養得貫通時、才敬以直內、便義以方外。)(「訓門人二」一一四・266)

99 中年以後之人、讀書不要多、只少少玩索、自見道理。

中年以上の人は、書を多く読む必要はない。少しのものをじっくり味わえば、道理はおのずから見えてくる。(記録者名を缺く)

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「玩索」は、上篇64條注參照。

本條のように、朱子は、自らの力を斟酌せずに、効果を大きく上げることばかりをめざす讀書の仕方を、36、42條までも繰返し批判する。また、前條と本條との關連を考えるなら、活力のあるなし、年齢、記憶力のあるなし(39條)など、自らの力量をわきまえた無理のない讀書を論ず言動は數多い。

100 千載而下、讀聖人之書、只看得他箇影象、大概路脈如此。若邊旁四畔、也未易理會得。齋。

千年以上も経ったいま、聖人の著作を読めば、その形がおよそこんなふうな骨格だ、とわかるだけだ。周邊のこと

がらは、なかなか簡単に読みとることはできない。呂熹

(校勘) 朝鮮古活字本 概↓槩

朝鮮古寫本 缺

(注) 「影象」は、「外見、姿形」の意味。同趣旨での用例は、次の通り。

「人心如一箇鏡、先未有一箇影象、有事物來、方始照見妍醜。若先有一箇影象在裏、如何照得。」(大學三 傳七章釋正心修身) 一六・34)

「路脈」は、もと「道筋」の意。ここでは大まかな骨格というような意味で譯出した。『語類』での用例は多いが、左に二例を挙げておく。

『可與共學』、有志於此。『可與適道』、已看見路脈。『可與立』、能有所立。『可與權』、遭變事而知其宜、此只是大綱如此說。』(論語一九 子罕篇下) 三七・986)

「先生曰、諸公看道理、尋得一線子路脈、著了。」(訓門人八) 一一〇・2899)

「四畔」は、「廣がりのある周邊」を指す。「張子之書一」の「天在四畔、地居其中」(九八・2606)という例がわかりやすい。

朱子語類卷第十一 學五 讀書法下

1 人之爲學、固是欲得之於心、體之於身。但不讀書、則

朱子語類讀書法篇譯注 (二) (興膳・木津・齋藤)

不知心之所得者何事。道夫。

人が學問を治めるのは、もとよりそれを心に會得し、わが身に體得するためだ。しかし、讀書しなければ、心に會得するものが何であるかはわからない。楊道夫

(注) 『朱子讀書法』卷三「綱領」冒頭に、同じ條が見える。

「得之於心、體之於身」は、「訓門人三」(一一五・2773)に本條と同じ楊道夫の記録で、「體認」と關連づけ、「夫所謂體認者、若曰體之於心而識之、猶所謂默會也」と錄されるのが参考になる。

2 讀書窮理、當體之於身。凡平日所講貫窮究者、不知逐

日常見得在心目間否。不然、則隨文逐義、趕趁期限、不見悅處、恐終無益。

書を讀んで、理を窮めるには、それをわが身に體得せねばならない。およそ日頃學び考えていることが、日々常に心の中に見えているかどうか。そうでなければ、文字づから意味を追いかけても、時間にせかされて面白みを見出せず、結局ものにならない。(記録者名を缺く)

(注) 「講貫」は、「講習」と同義。『國語』魯語下に「晝而講

貫、夕而習復」、韋昭は「貫、習也」と注する。『語類』中では、以下に擧げるとおり、『孟子』の「協學而詳說之、將以反說約也」を論ずる際に、やはり「講習」という意味でこの語を用いている。

「約自博中來。既博學、又詳說、講貫得直是精確、將來臨事自有箇頭緒。才有頭緒、便見簡約。若是平日講貫得不詳悉、乃至臨事只覺得千頭萬緒、更理會不下、如此則豈得爲約。」（孟子七 離婁下）五七・1345~6）

「心目」は「心の中」の意。『中庸』第二章「故至誠如神」の句に、朱子は「然惟誠之至極、而無一毫私僞留於心目之間者、乃能有以察其幾焉」と注する。

「趕趁」は、「理氣下 天地下（一・25）」と、「今之造曆者無定法、只是趕趁天之行度以求合、或過則損、不及則益、所以多差」とあるように、「追いかける、間に合わせる」の意。

本條は、記錄者名が缺けているのだが、「詩二板」（八一・2134）に本條と全く同じ文句があり、そこは潘時舉の記錄となっている。或いは本條も時舉が録したものかも知れない。該當箇所は次の通り。

「時舉說板詩、問、天體物而不遺、是指理而言。仁體事而無不在、是指人而言否。曰、體事而無不在、是指心而言也。天下一切事、皆此心發見爾。因言、讀書窮理、當體之於身。凡平日所講貫窮究者、不知逐日常見得在吾心目間否。不然、則隨文逐義、趕趁期限、不見悅處、恐終無益。時舉」（「詩二板」八

一・2133)

3 人常讀書、庶幾可以管攝此心、使之常存。橫渠有言、「書所以維持此心。一時放下、則一時德性有懈。」其何可廢。蓋卿

常に讀書していれば、この心を統御して、いつも安定した状態に保てるだろう。横渠先生は言われた、「書物はこの心を維持するよすがである。ひとたび書物を手放せば、たちまち徳性も弛んでしまふ」と。どうして讀書を捨てられようか。龔蓋卿

（注）「管攝」は、「コントロールする、制御する」の意。次のような用例がある。

「性以理言、情乃發用處、心即管攝性情者也。」（「性理二性情心意等名義」五・34）

「存心」は、心を一定に保つことをいう。この語は『孟子』離婁篇下「君子所以異於人者、以其存心也」と、盡心篇上の「孟子曰、盡其心者、知其性也。知其性、則知天矣。存其心、養其性、所以事天也」の二箇所に見えるのだが、朱子は前者を「處心（仁や禮を心に保つこと）」と考え（孟子七 離婁下）五七・1345など）、本條と緊密な關係を有する後者とは區別している。『語類』の「存心」を論ずる個所で、朱子は次のよう

に説明する。

「問、盡・知・存・義四字如何分別。曰、盡知是知底工夫、存義是守底工夫。」（孟子十 盡心上）六〇・1427

「問存心。曰、存心不在紙上寫底、且體認自家心是何物。聖賢說得極分曉。」（持守）一一・204

なお、讀書と關連づけて「存心」を言う例として、「大凡人須是存得此心、此心既存、則雖不讀書、亦有一箇長進處。纔一放蕩、則放下書冊、便其中無一點學問氣象」（訓門人三）一一五・2775）がある。

「横渠言」とは、『張子全書』卷六經學理篇三義理に見える、「讀書少則無由考校得義精、蓋書以維持此心、一時放下、則一時德性有懈、讀書則此心常在、不讀書則終看義理不見」という言を指すと思われる。また、以下に擧げるように、「訓門人二」ではこの「横渠言」をそのまま用いた言が記録されている。

「先生曰、書所以維持此心、若一時放下、則一時德性有懈。若能時時讀書、則此心庶可無間斷矣。」（一一四・2762）

4 初學於敬不能無間斷、只是才覺間斷、便提起此心。只是覺處、便是接續。某要得人只就讀書上體認義理。日間常讀書、則此心不走作、或只去事物中衰、則此心易得汨沒。知得如此、便就讀書上體認義理、便可喚轉來。賀孫。

朱子語類讀書法篇譯注（三）（興膳・木津・齋藤）

初學のうちには、「敬しむ」ことにおいて、どうしてもゆるみが生じてしまう。ゆるみが生まれたと氣づけば、すぐ心を引き締めねばならない。氣づいた時が續けどころだ。わたしは人に讀書の上で義理を體得するようにしてほしい。日頃常に讀書しておれば、この心は横道にそれない。ものごとにかかずらわっていると、心はじきに見失われてしまう。このことがわかれば、讀書の上で義理を體得でき、心と呼び戻すことができる。葉賀孫

（校勘）朝鮮古寫本 某↓某只

（注）「走作」は、横道にそれること。「間斷」は、「隙間」や「ゆるみ」を指す。また、「衰」は、ここでは「まぎれる、翻弄される」の意であるが、これまでには「格闘する」「激しく取り組む」などの意でも用いられ、豊かなニュアンスを伝える口語である。「汨沒」は、「埋没」の意。これらはみな、あるべき静かな状態に統御され得ない心の状態を形容する時に用いられる。次に擧げるのは、これらの語の内、本條と同じく「衰」「間斷」「汨沒」を同時に用いる例である。

「或言、在家衰衰、但不敢忘書冊、亦覺未免間斷。曰、只是無志。若說家事、又如何汨沒得自家。」（訓門人九）一二一・2920

「體認」については、先の1條の注を参照、また、上篇83條

に既出。

5 本心陷溺之久、義理浸灌未透、且宜讀書窮理。常不間斷、則物欲之心自不能勝、而本心之義理自安且固矣。

本然の心が久しく溺れていて、義理が十分に滲みわたらない場合は、ともかく讀書して理を窮めることだ。常に努力してゆるみが生まれないようにすれば、物慾の心もそれに勝つことはできず、本然の心の義理はおのずから安定して堅固になる。(記録者名を缺く)

(校勘) 朝鮮古活字本 間↓問

朝鮮古寫本 缺

(注) 「本心」は、『孟子』告子篇上に「今爲所識窮乏者得我而爲之。是亦不可以已乎。此之謂失其本心」と見え、「本然の心」のことを言う。次に擧げる例がわかりやすい。

「元初本心自是好、但做得錯了、做得不合宜、如所謂皆以善爲之、而不知其義。」(《論語十六 述而篇》三四・858)

「陷溺」は、俗世のさまざま慾や物質的なこと等にとらわれてゐることを言う。『語類』には次のような用例がある。

「有天理自然之安、無人欲陷溺之危。」(《力行》一三・224)

「人心是此身有知覺、有嗜欲者、如所謂我欲仁、從心所欲、性之欲也、感於物而動、此豈能無。但爲物誘而至於陷溺、則爲

害爾。故聖人以爲此人心、有知覺嗜欲、然無所主宰、則流而忘反、不可據以爲安、故曰危。」(《中庸》一章句序) 六二・1480
「他自邪說、何與我事。被他謾過、理會不得、便有陷溺。」(《訓門人四》一一六・2702)

6 須是存心與讀書爲一事、方得。方子。

「存心」と「讀書」を一體にしてこそよい。李方子

(校勘) 朝鮮古寫本 「讀書法上」にあり

(注) 「存心」は本稿3條の注参照。

7 人心不在軀殼裏、如何讀得聖人之書。只是杜撰鑿空說、元與他不相似。侗。

心がからだの中にないようでは、どうして聖人の書が讀めようか。いい加減にでたらめを言うばかりで、そもそも聖人の道理とは似ても似つかぬことになる。沈炯

(校勘) 朝鮮古寫本 人心在↓今世之人心在 只是↓盡是

(注) 「軀殼」は、體の外殼のこと。『語類』では、「心豈無運用、須常在軀殼之內」(《性理二 性情心意等名義》五・87)や、

「爲學之道、聖經賢傳所以告人者、已竭盡而無餘、不過欲人存此一心、使自家身有主宰。今人馳驚紛擾、一箇心都不在軀殼裏」(《訓門人八》一一〇・2906)のように、しばしば用いられる。

「鑿空」は、説をでっち上げることを言う。本條での用例のように、しばしば「杜撰」とともに用いられる。例えば、「今江西諸人之學、只是要約、更不務博。本來雖有些好處、臨事盡是鑿空杜撰」(「訓門人八」一二〇・2014)など。

8 讀書須將心貼在書冊上、逐句逐字、各有着落、方始好商量。大凡學者須是收拾此心、令專靜統一、日用動靜間都無馳走散亂、方始看得文字精審。如此、方是有本領。

讀書するには、心を書物の上をしっかり貼り付けて、一字一句ごとに落ちつくところがあるようにしてこそ、よく思索できる。およそ學ぶ者は、心を整えて純化集中させ、日々起居の間にも、決して亂れたり散ったりすることのないようにすれば、文章が精密に読めるようになる。これこそ實力がつく。(記録者名を缺く)

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「着落」は上篇64條の注參照。

「收拾」は、續く9條にも見られるが、ここでは心を安定させ整えることを言う。同題旨の用例は、「持守」(一一・201)の「學者爲學、未問眞知與力行、且要收拾此心、令有箇頓放處」や、「性理三 仁義禮智等名義」(六・116)の「敬非別是一時、

常喚醒此心便是。人毎日只鶻鶻突突過了、心都不曾收拾得在裏面」など数多い。

「日用動靜」は、日常起居を指す。次のような用例がある。

「日用應接動靜之間、這箇道理從這裏迸將出去。如箇寶塔、那毫光都從四面迸出去。」(孟子三 公孫丑上之下」五三・1283)

「本領」は、現代中國語と同じく、「實力・能力」の意。「依於仁、則德方有本領」(「論語一六 述而篇」三四・88)のよう

に用いられる。
「訓門人八」(一二〇・201)に、次の如くことほとんど同じ文句が見え、記録者は「銖」。本條は記録者名を缺くが、或いはその記録者である董銖が、本條の記録者でもあるかもしれない。「讀書須將心貼在書冊上、逐字看得各有着落、方好商量。須是收拾此心、令專靜統一、日用動靜間都在、不馳走散亂、方看得文字精審。如此、方是有本領。」

9 今人看文字、多是以昏怠去看、所以不子細。故學者且於靜處收拾教意思在裏、然後虛心去看、則其義理未有不明者也。祖道。

いまの人は文章を読むとき、ぼんやりと讀むことが多いので、綿密でないのだ。だから學ぶ者は、まずは静かなところで氣持ちが内面に落ちつくように心を整え、それから

虛心に讀めば、義理で明らかでないものはなくなる。曾祖道

(校勘) 朝鮮古寫本 「讀書法上」にあり

10 昔陳烈先生苦無記性。一日、讀孟子「學問之道無他、求其放心而已矣」、忽悟曰、我心不曾收得、如何記得書。遂閉門靜坐、不讀書百餘日、以收放心、却去讀書、遂一覽無遺。倜。

昔、陳烈先生は記憶力がないのに悩んでおられた。ある日、『孟子』の「學問の道は他でもない、その散漫になった心を取り戻すだけだ」というのを讀み、忽然として悟って言われるには、「わたしの心はまだ取り戻されていなかったのだ、どうして書物が憶えられよう」。そこで扉を閉ざし靜座して、讀書せぬこと百日餘り、ついに散漫になった心を取り戻された。そうして讀書したところ、一度目を通すだけで、餘すところがなかった。沈惲

(校勘) 朝鮮古寫本 「讀書法上」にあり。却去讀書→去去讀書

(注) 「放心」は、散漫になった心を言う。朱子は、散漫な心

を取り戻し安定した状態に整えることを、讀書の準備段階と考えていた。そもそも「放心」及び「求放心」という概念は、『孟子』告子篇上の「孟子曰、仁人心也、義人路也。舍其路而弗由、放其心而不知求、哀哉。人有鶏犬放、則知求之、有放心而不知求、學問之道無他、求其放心而已矣」に基づいている。朱子はこの概念について、「孟子九 告子上」で繰り返し説明を加えている。幾つか例を挙げよう。

「或問求放心。曰、此心非如鶏犬出外、又著去捉他。但存之、只在此、不用去捉他。放心、不獨是走作喚放、才昏睡去、也是放。只有些昏惰、便是放」(同上五九・1406)は、「走作」つまり横道に逸れてしまったものだけではなく、ぼんやりし出せば「放心」ということになる、と述べ、また、「放心、只是知得、便不放」(同上・1407)では、まず氣づくこと、心がけることの大切さを説く。さらに、『孟子』の「學問之道無他、求其放心而已」を引いた上で、「不是學問之道只有求放心一事、乃是學問之道皆所以求放心。如聖賢一言一語、都是道理」(同上・1408)と述べて、「求放心」が最終的な目標ではないことを論ず。一方で朱子は、『孟子』のこの概念自体は、重要ではあっても少々不十分と感じていた節がある。例えば、「孟子『求放心』語已是寬。若『居處恭、執事敬』二語、更無餘欠」(同上・1401)や、「今一箇無狀底人、忽然有覺、曰、我做得無狀了、便是此心存處。孟子言『求其放心』、亦說得慢了」(同上・1402)、さらに「人心纔覺時便在。孟子說『求放心』、『求』字

早是遲了」(同上・1407)などでは、氣づいたところから既に「收拾此心」は始まっているのだ、と述べる。また、「放心」については、「學六 持守」にも、集中して論じられるし、「訓門人」諸篇にも議論が繰り返される。

「陳烈」は、字は季慈、福州侯官の人(『宋史』卷四五八)。「語類」の他の箇所では、「孟子九 告子上」(五九・1414)に、「福州陳烈少年讀書不上、因見孟子『求放心』一段、遂閉門默坐半月出來、遂無書不讀。亦是有力量人、但失之怪耳」と、本條と同じエピソードが紹介される。

「靜坐」は、禪の坐禪に由來するが、二程子の哲學で重要な意味を與えられ、朱子の學問論ではことに重視される。特に「持守」(一一・217)では、「或問、疲倦時靜坐少頃、可否。曰、也不需要似禪和子樣去坐禪、方爲靜坐。但只令放教意思好、便了」、「始學工夫、須是靜坐。靜坐則本原定、雖不免逐物、及收歸來、也有箇安頓處」、「靜坐非是要如坐禪入定、斷絕思慮。只收斂此心、莫令走作閑思慮、則此心湛然無事、自然專一」、「人也有靜坐、無思念底時節、也有思量道理底時節、豈可畫爲兩塗。說靜坐時與讀書時工夫迥然不同。當靜坐涵養時、正要體察思繹道理、只此便是涵養、不是說喚醒提撕、將道理去却那邪思妄念。……今人之病、正在於靜坐讀書時二者工夫不一、所以差」などの集中した議論が見える。「靜坐」が程子の教であることについては、「近思錄」爲學大要篇に、「明道先生曰、性靜者可以爲學」、「訓門人三」(一一五・2779)に、「問、程子常教人

朱子語類讀書法篇譯注(三)(興膳・木津・齋藤)

靜坐、如何。曰、亦是他人要多慮、且教人收拾此心耳。初學亦當如此」とあるのが證となろう。

11 學者讀書、多緣心不在、故不見道理。聖賢言語本自分曉、只略略加意、自見得。若是專心、豈有不見。文蔚。

學ぶ者が讀書しても、しばしば心がそこにならないために、道理を見て取ることができない。聖賢のことばはもともと明らかなのだから、ちょっと氣をつければ、自然と見えてくる。このように心を集中すれば、何のわからぬことがある。陳文蔚

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「心不在」は、『大學』傳第七章に、「心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味」とあるのを意識した語であろう。「本自」は、古い口語の助字で、古詩「爲焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』卷一)にも、「生小出野里、本自無教訓」と、すでに用例が見えている。

「略略」は、いささか。「只是聖人合下體段已具、義理都曉得、略略恁地勘驗一過」(『大學二 經下』一五・286)など、用例は多い。

12 心不定、故見理不得。今且要讀書、須先定其心、使之

如止水、如明鏡。暗鏡如何照物。伯羽。

心が定まっていけないから、道理がわからないのだ。讀書するなら、まず心を落ちつかせ、明鏡止水のごとくにすることだ。曇った鏡でどうして物を映せよう。童伯羽

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「止水・明鏡」は、『莊子』德充符の「仲尼曰、人莫鑑於流水、而鑑於止水」や、『淮南子』俶眞訓の「莫窺形於生鐵、而窺於明鏡者、以觀其易也」に見える語で、しんと静まった心の状態を形容する語。「明鏡止水」と熟して用いられることも多い。

13 立志不定、如何讀書。芝。

志が定まらずに、どうして讀書できよう。陳芝

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

14 讀書有箇法、只是刷刮淨了那心後去看。若不曉得、又且放下、待他意思好時、又將來看。而今却說要虛心、心如何解虛得。而今正要將心在那上面。義剛。

讀書にはやり方がある。ともかく自分の心をすっきりさせてから読むことだ。わからなければ、しばらく書物から

離れ、心が整うのを待って、取り出して讀めばよい。いま、心を虚しくしろ、と言っても、心がどうして虚しくなるうか。まさに心をそこにあるようにするのだ。黃義剛

(注) 「刷刮」は、「刮刮」という形でも現れるが、「介甫只是刮刷太甚、凡州郡禁兵闕額、盡令勿補填」(「論治道」一〇八・208)や、「兵甲詭名不可免、善兵者亦不於此理會。纔有一人可用、便令其兼數人之料。軍中若無此、便不足以使人。故朝廷只是擇將、以其全數錢米與之、只責其成功、不來此屑屑計較。近來刮刷得都盡、朝廷方以爲覈實得好」(「論兵」一一〇・208)などから窺えるように、きれいさっぱり刷新し整理する、というのが原義。本條では、心の餘剩物をさっぱり拭い去る意味で用いられる。

「解」は助字、上篇89條注參照。

15 讀書、須是要身心都入在這一段裏面、更不問外面有何事、方見得一段道理出。如「博學而篤志、切問而近思」、如何却說箇「仁在其中」、蓋自家能常常存得此心、莫教走作、則理自然在其中。今人却一邊去看文字、一邊去思量外事、只是枉費了工夫。不如放下了文字、待打疊教意思靜了、却去看。祖道。

讀書するには、心身ともにその一段に打ち込んで、他に何があるかなど考えないようにしてこそ、その一段の道理が見えてくる。たとえば、「博く學んで篤く志し、切に問うて近く思う」の段で、どうして「仁はその中にある」と言えるのか。自分で心を常に一定に保ち、横道に逸れぬようにすれば、道理は自ずからそこにある。このごろの人ときたら、讀書しながら別のことを考えたりして、時間の無駄遣いばかりしている。それならいっそ書物を手放して、心がきちんと静まってから讀めばよい。曾祖道

(校勘) 朝鮮古寫本 冒頭が「大凡讀書」。箇下へ

(注) 「博學而篤志」以下は、『論語』子張篇の「博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣」を踏まえた語。『論語』の當該箇所について、『集注』は「未及乎力行而爲仁也。然從事於此、則心不外馳而所存自熟、故曰、仁在其中矣」と述べる。また、『語類』「論語三一 子張篇」に數々の言及があるが、本條の發言に近いものとしては、「問、博學而篤志、切問而近思、何以言仁在其中。曰、此四事只是爲學功夫、未是爲仁。必如夫子所以語顏冉者、乃正言爲仁耳。然人能博學而篤志、切問而近思、則心不放逸、天理可存、故曰仁在其中」(四九・120)が挙げられる。なお、この「論語三一 子張篇」でも、本條で譬えとして持ち出された、「博學篤志、切問近思」がどうして「仁在其

朱子語類讀書法篇譯注(二)(興膳・木津・齋藤)

中」となるのか、という問いかけは繰り返され、そこでもやはり「存心」がそれを解く重要な鍵と考えられていたことがわかる。

「打疊」は、前出の「安排」(上篇48條)や「收拾」(下篇8條)と同義で、「きちんと整える」の意。「然初學且須先打疊去雜思慮、作得基址、方可下手」(訓門人六一一七 2825)や、「須打疊了後、得一件方是一件、兩件方是兩件」(同上)などの用例がある。

「一邊く、一邊く」は、現代中國語と同じく、「くしながらくする」の意。

16 學者觀書多走作者、亦恐是根本上功夫未齊整、只是以紛擾雜亂心去看、不曾以湛然凝定心去看。不若先涵養本原、且將已熟底義理玩味、待其浹洽、然後去看書、便自知。只是如此。老蘇自述其學爲文處有云、「取古人之文而讀之、始覺其出言用意與己大異。及其久也、讀之益精、胸中豁然以明、若人之言固當然者」。此是他於學文上功夫有見處、可取以喻今日讀書、其功夫亦合如此。又曰、看得一兩段、却且放心胸寬閑、不可貪多。又曰、陸子靜嘗有旁人讀書之說、亦可且如此。

「學ぶものが讀書して横道にそれがちなのは、恐らく根本的なところで努力がきちんとなされておらず、ただ雑然と亂れた心で読んでいて、心をじっと落ちつけて讀まないからだ。何よりもまず本源をよく育てて、自分がすでに熟知している義理を深く味わい、それがすみずみまで行き渡ってから讀んでいけば、自然とわかる。とにかくそれしかない。老蘇が、自分の文章修行を述べた箇所で言っている、『古人の文を取って讀むと、始めはその言辭や考えが自分と大きく異なっているように思われる。しかししばらく讀んで、讀みがだんだん精密になると、心の中がからりと明らかになって、この人の言はもともとだ、と思えるようになる』と。これが彼が文を學ぶ上で拂った努力の見るべきところであり、我々の讀書においても、努力はかくあるべきだ、という教えに用いることができる。」また言われた、「一、二段讀んだら、しばらく胸中をゆったりのびやかにして、多く讀もうとせぬがよい」。また言われた、「陸子靜に旁人讀書の説があるが、それもこうしたことを言っている。」（記録者名を缺く）

（校勘） 朝鮮古活字本 功夫↓工夫
朝鮮古寫本 缺

（注）「齊整」は、「整齊」に同じ。「持守」（二二・208）に、「只收斂身心、整齊純一、不恁地放縱、便是敬」とある。

「紛擾」「雜亂」は、ともに雜然としてゐること。いずれも用例は多い。たとえば、「持守」（二二・213）に、「大率把捉不定、皆是不仁。人心湛然處定者、仁之本體。把捉不定者、私欲奪之、而動搖紛擾矣」や、「大學一經上」（一四・217）に、「問、安而後能慮。曰、若不知此、則自家先已紛擾、安能慮」など。「雜亂」については、「易一」（七五・391）に、「雖是雜亂、聖人却於雜亂中見其不雜亂之理」などの用例が見える。同義の「紛雜」という語も頻出する。例えば、「若只管思量利害、便紛紛雜雜、不能得了。且如只是思量好事、若思得紛雜、雖未必皆邪、已自不正大、漸漸便入於邪僻」（論語一一・二九・738）など。

「湛然」は、落ちついて靜かなこと。「持守」（二二・217）に、「靜坐非是要如坐禪入定、斷絕思慮。只收斂此心、莫令走作閑思慮、則此心湛然無事、自然專一。及其有事、則隨事而應、事已、則復湛然矣」、「心要精一。方靜時、須湛然在此、不得困頓、如鏡樣明、遇事時方好」（同上219）など。

「本原」は「本源」に同じ。「思索義理、涵養本原」（論知行九・149）また、「始學工夫、須是靜坐。靜坐則本原定、雖不免逐物、及收歸來、也有箇安頓處」（持守二二・217）な

ど。

「老蘇」の引用は、65條に既出の「上歐陽內翰第一書」を指す。同趣旨の言は、「嘗見老蘇說、他讀書孟子・論語・韓子及其他聖人之文、兀然端坐終日以讀書者七八年。方其始也、入其中而惶然。博觀於其外而駭然以驚、及其久也、讀之益精、而其中豁然以明、若人之言固當然者、猶未敢自出其言也。時既久、胸中之言日益多、不能自制、試出而書之、已而再三。讀之、渾渾乎覺其來之易矣」(訓門人九)(一一・298)など、この「上歐陽內翰第一書」中のことばを用いて讀書を論ず條は數多い。

「寬閑」は、「訓門人三」(一一五・276)に、「讀書看義理、須是開豁胸次、令磊落明快、恁地憂愁作甚底。……須是胸中寬閑始得」とあるように、のどやかな心持ちを言う語。

「陸子靜嘗有旁人讀書之說」とあるが何を指すのかにわかに特定しがたいが、「訓門人二」(一一四・260)に、「嘗見陸子靜說、且恁地依傍看。思之、此語說得好。公看文字、亦且就分明注解依傍看教熟。待自家意思與他意思相似、自通透。也自有一般人敏捷、都要看過、都會通曉。若不恁地、只是且就曉得處依傍看。……」という、陸子靜の言を踏まえたことばが記録され、恐らくそこでの「依傍看」という讀書態度のことを指すのであろう。

17 凡人看文字、初看時心尙要走作、道理尙見得未定、猶

朱子語類讀書法篇譯注(二)(興膳・木津・齊藤)

沒奈何。到看得定時、方入規矩、又只是在印板上面說相似、都不活。不活、則受用不得。須是玩味反覆、到得熟後、方始會活、方始會動、方有得受用處。若只恁生記去、這道理便死了。時舉。

およそ人が文章を読むとき、読み始めの時には、心はやはり横道に逸れがちで、道理もまだしっかり見えてこないが、それはどうしようもない。しっかり見えてくると、ようやく規範にかなうのだが、文字面の上ではもっともらしくても、全く生きてこない。生きてこなければ、身につけて用いることができない。深く繰り返し味わい、じっくり理解した後で、始めて生きて動き出し、身につくところが出てくる。單にこんな風に憶えていくなら、この道理は死んでしまう。潘時舉

(校勘) 朝鮮古寫本 潘時舉の「舉」を「學」の俗字に作る。

(注) 「入規矩」は、「學六 持守」(一一・280)に、「人心常炯炯在此、則四體不待羈束、而自入規矩。只爲人心有散緩時、故立許多規矩來維持之。但常常提警、教身入規矩內、則此心不放逸、而炯然在矣」とあるのを指す。

「須是方始」は、「須方」に同じで、一種の條件句。

『語類』にもよく用いられる。「學一 小學」(七・137)に、「前賢之言、須是真箇躬行佩服、方始有功」。また、「學二 總論爲學之方」(八・131)に、「學問須是大進一番、方始有益」など。

「活」は、朱子が重視する概念の一つ。「程子之書二」(九六・2663)に、「問、人心要活、則周流無窮而不滯於一隅。如何是活。曰、心無私、便可推行。活者、不死之謂」とあるのが、彼の考えをよく示している。これは、『近思錄』存養篇の、「人心常要活、則周流無窮、而不滯於一隅」にもとづく議論。また「持守」(一一・216)には、「死」と對比させながら論ずる「敬有死敬、有活敬。若只守着主一之敬、遇事不濟之以義、辨其是非、則不活」のような例がある。

「受用」は、自分の身につけて役立てること。「自論爲學工夫」(一〇四・2622)に、「理會得時、今老而死矣、能受用得幾年」、「歷代二」(一三五・3230)に、「古人年三十時、都理會得了、便受用行將去」とある。上篇49條に既出。

『朱子讀書法』卷一「熟讀精思」に、本條の「方入規矩」までとは同じ表現が見える。但し、その後半は、讀書法篇上の26條の前半に同じで、兩條が一つにまとまった形で記録される。

18 不可終日思量文字、恐成硬將心去馳逐了。亦須空閑少頃、養精神、又來看。淳。

一日中、文面をあれこれ考えるのはよくない、心を無理

やり驅り立てることになりかねないからだ。しばらくは何もしないで、活力を養い、再度読み出すべきである。淳

(注) 「空閑」は、のんびりとすること。「持守」(一一・202)に、「今於日用間空閑時、收得此心在這裏截然、這便是喜怒哀樂未發之中、便是渾然天理」とある。

「精神」は、前出98條の注を参照。

19 讀書閑暇、且靜坐、教他心平氣定、見得道理漸次分曉。季札錄云、庶幾心平氣和、可以思索義理。這箇却是一身總會處。且如看大學「在明明德」一句、須常常提醒在這裏。他日長進、亦只在這裏。人只是一箇心做本、須存得在這裏、識得他條理脈絡、自有貫通處。賜。季札錄云、問、伊川見人靜坐、如何便歎其善學。曰、這却是一箇總要處。又云、大學「在明明德」一句、常常提醒。能如此、便有進步處。蓋其原自此發見。人只一心爲本。存得此心、於事物方知有脈絡貫通處。

讀書の合間には、しばし靜坐して、心を静め氣を安定させれば、道理がだんだんはつきりわかるようになる。季札の記録に云う、「心が静まり氣が安定すれば、義理を思索することができる。」これこそ、最も肝心なところだ。たとえば、『大

學』の「明德を明らかにするに在り」の句を読んで、絶えずこの點に心しておかねばならない。將來大きく進歩するにも、もっぱらここにかかっている。人はひたすら一つの心を本にして、それを安定した状態に保てば、筋道におのずと貫通するところがあるのがわかる。林賜 季札の記録に云う、「伊川先生は、人が靜坐しているのを見て、なぜその人の學問が優れていると感嘆したのですか」と訊ねたところ、先生が言われるには、「これこそ最も肝心なところだ。」また言われた、「大學の明德を明らかにするに在り」の一句に、常に心しておくべきだ。そうできれば進歩する。進歩の本はそこから現われるのだ。人は、ただ一つの心を本とするのだ。その心を保ってこそ、物事において筋道のしっくり貫通する所がわかる。

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「靜坐」は、第10條參照。

「總會處」は、「訓門人五」(一一七・283)に、「聖人千言萬語、都是日用間本分合做底工夫。只是立談之頃、要見總會處、未易以一言決。……如博我以文、約我以禮、博文便是要一一去用工、何曾說總會處。又如深造之以道、欲其自得之也、深造以道、便是要一一用工、到自得、方是總會處。……學者固是要見總會處。而今只管說箇總會處、如與點之類、只恐孤單沒合殺、

朱子語類讀書法篇譯注(二)(興膳・木津・齋藤)

下梢流入釋老去、如何會有詠而歸底意思」とある。

「在明明德」は、「大學之道、在明明德、在親民、在止於至善」という『大學』冒頭のことは、『語類』「大學一上」には、この句に關する論が多く見られる。例えば、「明明德、明只是提撕也」(二四・261)、「大學在明明德一句、當常常提撕。能如此、便有進步處。蓋其原自此發見。人只一心爲本。存得此心、於事物方知有脈絡貫通處」(同上)など。

「提醒」は、「提撕」と同じで、注意を喚起すること。「持守」(一二・206)に、「但此事甚易、只如此提醒、莫令昏昧、一二日便可見效、且易而省力」、「自論爲學工夫」(一〇四・2612)に、「讀書須讀到不忍捨處、方是見得真味。……蓋人心之靈、天理所在、用之則愈明。只提醒精神、終日著意、看得多少文字、窮得多少義理。徒爲懶倦、則精神自是憤憤、只恁昏塞不通、可惜」とみえる。

20 大凡讀書、且要讀、不可只管思。口中讀、則心中閑、而義理自出。某之始學、亦如是爾、更無別法。節。

およそ讀書するときには、まずは讀むのが大切で、あれこれ考えるばかりではいけない。口で讀めば心が落ちつき、義理はおのずから現われ出る。わたしが學び始めた時も、こうしたのだ。他に方法などない。甘節

(校勘) 朝鮮古寫本 節↓方矛、甘節同

譯注者後記 本稿作成の過程で、吉川雅之、濱田麻矢、夏風、田口一郎の諸君による譯注の草稿を参照した。謝意を表する。